

現代のことは

稲賀 繁美

10年単位で現在を読む。2011年が3・11の震災だったとすれば20年にはオリンピックが予定される。21世紀の10年代はその折り返し地点を越えた。東アジアでの日本の立ち位置が問われている。

震災のあと、香港では東北への支援が盛り上がった。フカヒレが要因だった。香港で消費されるフカヒレの多くが、気仙沼から供給されていた。その気仙沼が大打撃を被った。香港の市民にとってこ

の災厄はもはや他人事ではなかったからだ。希望とは逆境にあつてこそ育まれる。東日本震災後に仙台を訪問された皇后さまに黄色の水仙を被災者が手渡した。台湾では14年にヒマワリ運動が話題となった。学生たちを中心立法院が占拠された。太陽花学運とも呼ぶ。これはその後香港に飛び火し、黄色の雨傘となった。こちらは普通選挙の実施を求める市民運動であり、どちらも路上

希望の色は何色か



占拠などの手段によって、一時的な解放区を築いている。そこには紙のハリボテで作られた大小のトトロが黄色の雨傘をもって登場した。ここで黄色が支配的な色彩となったのは、たんなる偶然なのだろうか。

You may say I am a dreamer, yes, but I am not the only one.
香港の黄色い傘の運動で唱えられた歌の一節である。

僕は人からは夢追い人と呼ばれるかもしれない。でもかまわない。けっして僕ひとりだけではないのだから。

お互いに直接には知らない市民の絆が、国境や体制を超えて広がってゆく。アラブの春以来、もはやいかなる政治体制による検閲も、このネット環境の現実を、それ以前に戻すことは不可能だろう。水仙、ヒマワリそして黄色の雨傘は、従来の国家体制の枠組みを超えて、人々の意思に大きなつねりを巻き起こす。

「希望の地平」をテーマに同志社大学でアジア学会が今夏開催された。その特別ラウンドテーブルで、韓国の林志弦氏は、日韓や日中に蟠る歴史問題について、こう述べた。

たしかにこの30年、東アジアでは隣国同士との歴史認識の齟齬に起因する諍いが絶えない。だがそれ以前には、隣国の教科書がどのように歴史を記載しているかに、人々は関心さえ抱いていなかった。それに比べれば、現在のほうがはるかに希望を持てる。誰であれ、自分たちの出生以前の出来事に対して責任は負えない。だが過去の歴史をいかに後世に伝えるかの責任は、われわれの双肩にかかっている。過去がどう描かれるかは予測を超えるが、あるべき未来を描くことは、子孫への責務だろう。和解は期待されるべきだが、和解の統合は危うい。和解の食い違いを共有する努力にこそ、将来への希望

を託したい、と。パンドラの箱が開かれ、災厄が世界中にまき散らされた後に、箱の底には「希望」が残ったという。思うに災厄が蔓延したからこそ、空虚な箱には希望が宿ったのではないか。希望とは、希望に欠けた現実のさなかに芽吹く命ではないか。黄色の傘も、雨が降るからこそ繁殖した。敗戦後の日本で一世を風靡したたばこ「ピース」は、焦土となった国土に橄欖の芽をもたらす平和のハトであり、それは大洪水の去ったあとの蒼鷺の空に羽ばたいていた。

(国際日本文化研究センター副所長、比較文化・文化交流史)